

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

虫麻呂の浦島伝説歌の主題

著者	菊地 義裕
著者別名	KIKUCHI Yoshihiro
雑誌名	文学論藻
巻	95
ページ	7-24
発行年	2021-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00012819/

虫麻呂の浦島伝説歌の主題

序

『万葉集』巻九には、「高橋虫麻呂歌集」所出の作品として「水江の浦島の子を詠む一首并せて短歌」が収められている。浦島子の仙郷淹留説話を歌に表現したもので、長反歌二首（一七四〇・四一）から成るその作品は、虫麻呂自身の作として評価されている。

長反歌の全体は次の通りである。^{（注1）}
（すみのかえ）

A 春の日の 霞める時に 墨吉の 岸に出で居て 釣舟
の とをらふ見れば いにしへの ことそ思ほゆる

B 水江の 浦島の子が 鰹釣り 鯛釣り誇り 七日まで
家にも来ずて 海界を 過ぎて漕ぎ行くに 海神の

菊 地 義 裕

神のをとめに たまさかに い漕ぎ向かひ 相あたら
ひ こと成りしかば かき結び 常世に至り 海神の
神の宮の 内のへの 妙なる殿に 携はり 二人入り
居て 老いもせず 死にもせずして 永き世に あり
けるものを

C 世間の 愚か人の 我妹子に 告げて語らく しまし
くは 家に帰りて 父母に 事も語らひ 明日のごと
我は来なむと 言ひければ 妹が言へらく 常世辺に
また帰り来て 今のごと 逢はむとならば この櫛笥
開くなゆめと そこらくに 堅めしことを

D 墨吉に 帰り来りて 家見れど 家も見かねて 里見
れど 里も見かねて 怪しみと そこに思はく 家ゆ

出でて 三年の間に 垣もなく 家失せめやと この
箱を 開きて見てば もとのごと 家はあらむと 玉
櫛 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世辺に
たなびきぬれば 立ち走り 叫び袖振り こいまる
び 足ずりしつつ たちまちに 心消失せぬ 若かり
し 肌もしわみぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆな
は 息さへ絶えて 後つひに 命死にける

E 水江の 浦島の子が 家所見ゆ (9・一七四〇)

反歌

常世辺に 住むべきものを 剣大刀 己^なが心から おそ
やこの君 (二七四二)

長歌を内容を踏まえて五段に分けて示したが、A・Eは序
と結にあたり、Aでは、春の日の霞んでいるときに墨吉（撰
津国の住吉）の岸に出て釣り船が揺れているのを見ると、昔
のことが思われるとして、B以下の浦島子の伝説が導かれる。
またEは、伝説の語りの終息を受けて、「水江の浦島の子が家
所見ゆ」と歌われ、「いにしへ」から現在へと覚醒したかのこ
とく、Aと呼応して墨吉の地が歌われる。

一方、伝説は、まずBで、浦島子が海の彼方の理想郷であ
る常世に赴くことになった経緯が述べられる。それによると、
漁に出た浦島子は、鰹や鯛が釣りに釣れて、七日の間家にも
帰らなかつた。そして、そのまま海の果ての「海界」を越え
て、海の神の神女と結ばれ、「老いもせず死にもせずして」、常
世の「神の宮」に二人で住むことになったという。

また、次のCでは、浦島子が妻に対して、一度家に帰って
父母に経緯を話し、再び帰って来たいと語ったことが述べら
れ、妻からは、帰って来て再会したいならば、自分が渡す「櫛
笥」を開いてはならないことが語られる。常世と現世との往
来をめぐる二人の語らい、それがCの内容である。続くDは、
浦島の帰郷の次第と結末の部分で、「墨吉」に戻ってあたりを
見回しても「家」や「里」は見出せず、ただただ困惑する浦
島の様子が述べられ、そうしたなかで、開けないと約束して
いた「櫛笥」を開けてしまったこと、またその結果、箱から
「白雲」が出て常世へとたなびき、浦島子がそれを求めようと
しても求められず、正気を失い、また肌には皺が寄り、髪は
白髪となって、たちまちに老いて、ついには亡くなってしまっ

たことが述べられる。

浦島子の仙郷への淹留を伝える話は、こうした虫麻呂作歌のほか、『日本書紀』の雄略天皇二十二年秋七月条や『釈日本紀』に収められる『丹後国風土記』逸文にも見られるところであり、従来それらの記事も視野に収めて当該作品について検討が重ねられている。とりわけ、作品の舞台については、『日本書紀』『丹後国風土記』が丹波国与謝郡筒川とするのに対し、虫麻呂作歌の場合は「墨吉」ゆかりの話として詠じている。このため、虫麻呂作歌のもとを成した浦島伝説が土地に取材したものなのか、書承を受けてその知識をもとにしての創作なのか、意見の分かれるところである。^(注2)

ただし、そのいずれであつても、虫麻呂作歌の場合には、作中の語り手の言葉として、浦島子については、長歌では、「世間の愚か人の 我妹子に告げて語らく」、反歌では「剣大刀己が心からおそやこの君」と、それぞれ批判的に歌われている。これらは浦島子に対する批評の言であり、この作品が浦島伝説そのものを長歌に移し取って表現すること、それを自己目的としたものでないことは明らかである。伝説を虫麻呂の視

点で受け止め、浦島子をみずからの内にとらえ直して作品に位置づけてみる、そうした文芸的営為の所産と考えられる。したがって、浦島子の人物像の形象は、そのまま虫麻呂が問いたかったものの、いわば作品の主題というものに直結する性格のものである。

本稿では、浦島子に対する「世間の愚か人」という評価に注目し、浦島子が愚者たる理由を問いつつ、この作品の意図するところ、主題について考察したい。

一 「世間の愚人」の性格

「世間の愚人」は「ヨノナカノオロカヒト」と訓読される。「世間之」はヨノナカノ。「愚人」は旧訓シレタルヒト、『万葉集略解』はウルケキヒト、『万葉集古義』はカタクナヒト、早く『新訓万葉集』がオロカヒトとよみ、続いて『万葉集全釈』が同様によんで以降この訓が定着し、現在に至っている。なお、『万葉集全註釈』は『類聚名義抄』に「愚」についてオロカナリの訓があることを、また『日本古典文学大系』は「長寛年間加点の石山寺本大唐西域記卷第三に愚夫にオロカヒト

の傍訓がある」ことを根拠とする。「愚人」の語は、『万葉集』では、ほかには卷十六の左注に一例（三八七九）見られるだけであり、作歌での使用はこの例のみである。また「ヨノナカ」の語は『万葉集』に四十五例見られるが、「愚人」の語が下接する「世間の愚人」の例もこの例のみである。「世間の愚人」の表記表現は、『万葉集』では唯一の例であり、特に選んで用いられたものと考えられる。

先行研究においてこの表現を正面から取り上げたのは佐竹昭広「無常」について^(注3)である。佐竹は、「数々の經典に「愚鈍な者」のことを「世間愚人」「世間愚夫」「世間愚痴人」などと言った例が散見する」ことを指摘し、当該例を視野に収めて、『仏説略教誡經』『尊婆須蜜菩薩所集論卷第一』といった奈良時代に受容されていた經典に見える「世間愚人」の例を提示している。そして、それらの例に照らすと、当該歌の「世間の愚人」は、漢籍というより、漢訳仏典に負っている可能性が少なくない」とする。また、その語義に触れて、「この筈開くなゆめ」の禁を破った浦島子は、「人間の世にある以上、免れることのできない「老」と「死」の定め」「無常」

を思い知らされたのであり、

「不老不死」「常世」の国には時間というものが無い。「有為」の世界とは反対に、そこは永遠に「常住」。「常住」は「無常」の反対語。「有為無常」と言い、「世間無常」と言う。「世間愚人」の世界は呵責なき「無常」の世界であつた。浦島子は、その意味で「世間愚人」であつた。あくまで「俗愚の人」に過ぎなかつた。

という。佐竹は神仙思想と仏教思想の重なりを踏まえて、浦島子は無常の世界に生きる「俗愚の人」であつたと説く^(注4)。

こうした佐竹の指摘を踏まえて、大谷雅夫「萬葉集と仏教および中国文学」は、佐竹が指摘する、仏典の二例に加えて「百喻經」に「愚人」あるいは「世間愚人」の語が頻出する^(注5)ことを指摘する。そして、手に入れた高価な香木を市場で売ろうとして売れずに、よく売れる炭同様に香木を焼いて炭にした「世間の愚人」に比される長者の子の話（第二十二話）を例に、

せつかく手に入れた常世の国の安楽を捨てて身を滅ぼしてしまった浦島も、「世間の愚人も亦た復たかくの如し」

と言われるべきひとりであった。

という。

「世間愚人」の概念をもう少し明確にする必要があるが、この語が仏典に由来することは了解される。「愚人」「愚者」「愚夫」「愚痴」は、仏典にかかわって愚かな人、愚かな凡夫をさす。^(注6) 仏教説話集である『日本霊異記』を見ると、「愚」の用字例としては「愚痴」四例、「愚人」三例、「愚夫」二例、「愚者」「愚僧」「愚俗」各一例あり、全体で十二例となる。^(注7) このうち「愚痴」の例に注目すると、次のような内容で伝わる。

I 愚痴の類は迷執を懷き、罪福を信なりとせず。深智の儔ハ内外を觀て、信として因果を恐る。^(上巻・序文)

II 実の魚体なりと雖も、聖人の食物に就きては、法花經に化せり。我、愚痴邪見にして、因果を知らずして、犯し逼め悩乱す。願はくは罪を脱し賜へ。^(下巻・第六)

III 紀伊国海部郡仁嗜の浜中の村に、一の愚痴なる夫有りき。姓名詳かならず。自性愚痴にして、因果を知らず。^{(下}

巻・第二十九、二例)

Iは上巻の序文の一節である。応神天皇の時代に儒教を中

心にした外典が渡来し、欽明天皇の時代に仏教ゆかりの内典が渡来したが、儒教を学ぶものは仏法を非難し、内典を読む者は外典を軽んじることを記したのち、引用の箇所が述べられる。「愚痴」、愚かな人たちは迷いにとらわれて、罪福の原理、すなわち悪因には悪果が、善因には善果がもたらされるという因果応報の道理を信用しないこと、対して知恵深い仏教徒は内典・外典をともに見て親しみ、因果応報の教えを信じ、その道理を恐れることが述べられる。

IIは下巻第六話「禪師の食はむとする魚の化して法花經と作りて、俗の誹を覆しし縁」の一節である。この話では、称徳天皇の時代、吉野の山寺に住んでいた高僧が熱心な仏道修行のために体力が衰え、弟子に魚を食べたいと言ったことが伝えられる。そこで弟子は紀伊国の海辺に行き、新鮮なボラを八匹求めて帰って来る。ところが途中で知り合いの檀家三人に会い、何を持っているのか尋ねられると、法華經と答える。これを信用しない檀家たちは大和の市場でも再び同じように尋ね、強引に小櫃を開けさせる。すると、そこには法華經が入っていた。それでもまだ信用しない檀家の一人は山寺

まで後を付けて行き、高僧と弟子の話に耳を傾ける。弟子が高僧に事の次第を話すと、高僧は仏の加護であることを悟り、魚を口にする。引用部分はこの様子を受けて、檀家の者が語った一節である。本当は魚ではあっても聖人の食べ物としては法華経になる。自分は「愚痴邪見ぐぢじけんにして、因果を知らず」、お弟子に逆らい責め悩なやましたと言つて、事の次第を詫わびる。「愚痴邪見」の「邪見」は因果の道理を無視することという。

よつてここは、自身が愚かで、因果応報の道理をわきまえないために、僧を悩なやますことになったことを言つたものである。なお、新日本古典文学大系『日本霊異記』は、この語句にふれて、『諸経要集』(十惡部・邪見緣)に「愚痴之人、不レ識二因果一」とあることを注している。(注)

Ⅲは、下巻第二十九話「村童さとわなこの戯あそれに木の仏像を剋きみ、愚かなる夫をのこ斫きき破りて、以て現に惡死の報を得し緣」に見える記述である。この話は、村の子どもが山で遊んでいて、戯あそれに山道に木の仏像を作り供養のまねごとをしていた。ときに「愚かなる夫」(愚夫)がその仏像をあざけり笑ひ、斧で切り捨てると、いくらも行かないうちに死んでしまったという内

容である。この話には、死んだ男をさして「愚夫」の語が題も含めて二例見え、掲出の引用部にも「愚痴なる夫」(愚痴夫)とある。この男についても「自性愚痴じじょうぐぢにして、因果を知らず」とあり、生まれつき愚か者で、因果の道理を理解していない者とされる。またその死にかかわつては、続く本文中に「諒まことに知る、護法無きにはあらずといふことを」とあり、戯あそれに刻んだ仏像にも仏法を守護する神がついていることが述べられる。男の死は因果を知らないことによる仏罰として語られている。

このように『日本霊異記』における「愚痴」四例、合わせて「愚夫」二例を見ると、共通するのは仏法が説く因果応報の道理を知らないところに「愚」たる要素が抱かれているということである。また、三例を数える「愚人」の語にしても、その一つは上巻第十五話に見られ、次のように伝えられる。

昔、故もとの京の時に、一の愚人有ありき。因果を信とせず。僧の乞食するを見て、忿いかりて撃たむと欲ふ。時に僧、田の水に走り入る。追ひて之を執とふ。僧、忍ぶこと得ずして、以て之を咒縛くわくせり。愚人顛沛たふし、東西に狂ひ走

る。僧即ち遠く去れり。……

第十五話は「悪人の乞食こつじきの僧を逼おびよシテ、現に悪報を得し縁」と題される話で、引用箇所はその冒頭の部分である。平城京以前、飛鳥・藤原の宮の時代に一人の「愚人」がおり、やはり因果応報の道理を信用しなかったことが特記される。

この「愚人」の語は、諸本によつて異同があり、「男人」とも記される。(まろ)もつとも、後文に「愚人顛沛たふレ、東西に狂くるひ走る」とあるから、この男が「愚人」ととらえられていることは動かない。話の内容は、男が乞食の行をしていた僧に腹を立てて打とうとしたところ、僧は田に逃げ込み、男にとらえられる。しかし僧は、呪文を唱えて法力によつて男の体の自由を奪つてしまう。結果、男は転げ回り、狂つたように走り回つたとある。

こうした托鉢の僧をばかにすることは、前掲の佐竹論文が「世間愚人」の用例として示す、『仏説略教誡經』の提示例にも見られるところである。それには、

我が弟子、髪を剃り、衣を染め、鉢を持ちて家を巡り、乞食して自ら済ふ。世間愚人の輕慢する所なり。

とあり、鉢を持って家々を巡り、食を乞うこと、それは「世間愚人」が「輕慢」、ばかにする行為だという。この「世間愚人」も『日本靈異記』に照らせば、仏罰を恐れず、因果応報の理を知らない俗人ということになる。『靈異記』の「愚」の他の例（「愚者」中巻第二話、「愚僧」中巻第十八話、「愚人」下巻第十八話、「愚俗」下巻第十九話）も内容は一樣ではないものの、総じて俗人としてとらえられるものである。

先行研究をもとに、仏典ゆかりの「愚人」および同類の語を、このように『日本靈異記』をもつて整理すると、因果応報の道理を解さないところに愚か人たる由縁のあることがわかる。この点が仏典そのものからも裏付けられることは、新大系の注記（前掲『諸經要集』）が示すところであり、虫麻呂の当該歌の理解においても見過ごしにできないことである。

なお、『万葉集』卷十六には、「能登国の歌三首」と題された歌群の一首として、次の歌が伝わる。

梯立の 熊來のやらに 新羅斧 落とし入れ わし あ
げてあげて な泣かしそね 浮き出づるやと 見む わ
し

(16・三八七八)

左注には、「右の歌一首、伝へて云はく、或る愚人^{おろかひと}あり、斧海の底に墮ちて、鉄の沈み水に浮く理無きことを解らず。聊かにこの歌を作り、口吟^{うた}ひて諭^{をし}へと為す、といふ」とあり、ここにも「愚人」の語が見られる。前記したように、『万葉集』に見える「愚人」の例は、虫麻呂歌とこの左注の記載のみである。左注によると、ある「愚人」がいて、斧が海底に落ちて、沈んだ鉄が水に浮く道理がないことを知らなかったので、この歌を作つて口ずさみ、教えたという。この場合は、落ちた鉄の斧が水に浮かぶはずがないことを男が知らないというのであるから、「愚者」たる要素は、道理がわからない点に求められているといえよう。

この歌については斧を落としたのは智者で、そばに居た愚者が斧が浮く道理がないことを知らずに、「浮き出づるや」とともに見ようと詠んだものという解も行われている。^(注10)この場合は道理のわからない「愚人」が歌を作ったことになる。ただし、どちらの解でも「愚人」が道理のわからない人をさすことは変わりがない。

以上の例を通して見ると、「愚人」とは、基本的には佐竹論

文が指摘するように仏典と深くかわり、因果応報や仏罰などその道理のわからない者をさすということになる。また『万葉集』巻十六のような例もあることを踏まえると、広くは世の道理に不明な者と解される。『日本霊異記』の例は後代資料の感がないわけではないが、「愚痴」「愚人」の類が仏教語に由来するとすると、語の使用に際しては宗教の伝統の内に古来の語義が保たれているとみることが許されよう。とりわけ「世間之愚人」の表記・表現は『万葉集』で唯一例であり、特殊である。それだけにそれなりの意をもつものと考えられる。

また、「世間」の語も注意される。「世間」は「ヨノナカ」と訓読されるが、「ヨノナカ」の語は『万葉集』では、一字一音で「余能奈可」(三例)、「与能奈可」(二例)、「余乃奈可」(「余乃奈迦」「余能奈迦」「餘乃奈加」(各一例)と表記されるほか、漢字二字で「世間」(三三例)、「世中」(三三例)、「俗中」(二例)と表記される。このうち、もつとも多いのは、当該歌にも用いられる「世間」の表記であり、この漢語は、仏教にかかわつては、「世は遷流、間は中の意。うつり流れてとどまらない現象世界をいう」と説明される。^(注11)佐竹論文の指摘の通

り無常の世界ということであるが、わざわざこの語を冠して「世間の愚か人」と表現するのであるから、表現の背景として、この思想の社会への浸潤の度合いについても注意を向けておきたい。^(注2)

指標となるのは類型表現である。それらを整理すると、次のようになる。

a 世の中や常にありける（5・八〇四）／世間も常にし
あらねば（8・一四五九）／世の中は常なきものと
（19・四一六〇）

b 世間は空しきものと（3・四四二、5・七九三）

c 世間は数なきものか（17・三九六三）／世の中は数なきものぞ（17・三九七三）

a は「ヨノナカ」は「常なし」、すなわち無常であるとするもの。b は「空しきもの」、c は「数なきもの」とするものがある。

このうち、b の例は次の二首である。

世間は空しきものとあらむとぞ　この照る月は満ちかけしける
（3・四四二）

世間は空しきものと知る時し　いよよますます悲しかりけり
（5・七九三）

卷三の歌は、「膳部王を悲傷する歌」と題された、作者未詳の歌である。膳部王は神亀六年（七二九）二月に謀反の罪で処刑された長屋王の長男で、このときにともに亡くなった人物である。一首は、膳部王の死に接して抱かざるを得なかった「世間は空しきもの」の感慨を、夜空に照る月の満ち欠けに譬えたものである。また卷五の歌は、大伴旅人の歌で、不幸な出来事が重なり、凶事の知らせが届くなかで、「永く崩心の悲しびを懷き、独り断腸の涙を流す」（序文）という悲痛な思いで作られたことが伝えられる。

「世間は空しきもの」、それが共通した認識であるが、一首目に歌われた月の満ち欠けについては、卷七に次のような歌も伝わる。

こもりくの泊瀬の山に照る月は満ち欠けしけり　人の常なき
（7・一二七〇）

この歌は卷七雑歌部の「物に寄せて思ひを発す」と題された一首である。「泊瀬の山に照る月」の満ち欠けに接して、人も

また「常なき」ものと認識したというのである。月の満ち欠けは『万葉集』ではもう一例、巻十九所収の伴家持の「世間の無常を悲しぶる歌」で詠まれている。そこでも月の満ち欠けは、「世間は常なきもの」、そのことを象徴する事象として挙げられている（四一六〇）。「世間は空しきもの」、その「空しき」の認識は、「常なし」という無常の感慨に根ざしているのであり、「常なし」のゆえに、はかなく、また仮のものでしかないという世間虚仮の認識にも通じることになる。cの「ヨノナカ」は「数なきもの」の表現はこの認識に基づくものである。

『万葉集』にはこのほかに、「世間は常かくのみ」、「世間はかくのみならし」といった「かくのみ」の表現も一類を成し、これらの表現を通して無常の局面に接しての慰め・諦めの感慨が示されている。^(注13)

こうした類型表現が示すのは、奈良朝の社会に浸潤した「世間無常」「世間虚仮」の認識である。浦島子に対する「世間の愚か人」の表現は、浦島子がそうした無常な世に身を置く、運命とて定まらない俗人として、またそうした世にあつて因果

の道理のわからない人間として、作品内で認識され位置づけられていることを示している。問題はこの表現が作品に即してどのように理解されるかである。

二 愚者たる由縁

文脈上、「世間の愚か人」は「常世」での神女との生活を念頭に、次のように示される。

……海神の 神の宮の 内のへの 妙なる殿に 携はり
二人入り居て 老いもせず 死にもせずして 永き世に
ありけるものを 世間の 愚か人の 我妹子に 告げて
語らく……

「世間の愚か人」の称は、常世から回帰した浦島子に即して用いられる。また、「我妹子に告げて語らく」以下の箇所は、浦島子と神女である「我妹子」との対話、および浦島子の心話を交えた心の葛藤を中心に構成されている。この箇所をわかりやすく分かち書きにして示すと、次のようになる。

世間の 愚か人の 我妹子に 告げて語らく

①「しましくは 家に帰りて 父母に 事も語らひ 明日

のごと 我は来なむ」

と言ひければ 妹が言へらく

②「常世辺に また帰り来て 今のごと 逢はむとならば

この櫛笥 開くなゆめ」

と そこらくに 堅めしことを

墨吉に 帰り来りて 家見れど 家も見かねて 里見れ

ど 里も見かねて 怪しみと そこに思はく

③「家ゆ出でて 三年の間に 垣もなく 家失せめや」

と

④「この箱を 開きて見れば もとのごと 家はあらむ」

と

玉櫛笥 少し開くに

①と②が浦島子と神女との会話である。まず浦島子は、妻に語って、しばらくの間家に帰って父母に事の次第を話し、明日にでも帰って来ようと告げる(①)。これを聞いた妻は、常世にまた帰ってきて、今のように会いたいと思うならば、この櫛笥の箱をけつして開いてはならないと告げ、戒める(②)。この次第を踏まえて、中西進「愚について」は、

虫麻呂をして愚者だといわせたものは、「須臾は 家に歸りて 父母に 事も告らひ 明日のごと われは来なむ」と言つたことであつた。父母に事情を説明してきたいといつたことをもつて愚かだという。

と説き、親孝行の「孝」の行為ゆえに「愚」とされるといふ。^(注1) またその理由として、孝は「なずんだ世俗行動の最たるもの」であり、「これは神仙の軽やかさからは程遠い」ものであり、「一見積極的ではめられるべき世俗の行動者こそが、虫麻呂の目には愚かしく映る」といい、「孝者を愚者だといひ切つた虫麻呂は、当時の官人倫理への大きな反逆宣言をしたことになる」という。

「孝」といつた「世俗行動」は「神仙の軽やかさからは程遠い」とあり、見解は浦島子を常世の側から評価してのものと解されるが、浦島子が櫛笥を開けず「明日のごと我は来なむ」の言葉通りに常世の世界に戻つたならば、浦島子は「世間の愚か人」とは評されなかつたはずである。してみると、浦島子の「愚者」たる由縁は、当然のことながら、直接には常世に回帰しなかつたことに求められるべきであらう。浦島子の

「愚」の認識が「父母に事も語らひ」という「孝」に起因するとは考えがたいのではなからうか。

「孝」の思想は、中西論が的確に指摘するように、儒教思想の根幹を成す徳目として広く社会に定着していたところであり、養老令「学令」の経周易尚書条には、『孝経』が『論語』とともに大学寮で学ぶべき必須の経書とされている。また『続日本紀』天平宝字元年（七五七）四月四日条には、孝を「百行の本」と称揚し、家ごとに『孝経』一本を所蔵して学ぶべきことが命じられている。『万葉集』においても、巻五所収の山上憶良の「令反感情歌一首」（神龜五年（七二八））の序文や「悲歎俗道仮合即離易去難留詩一首」（天平五年（七三三））の序文において、儒教の徳目として親への孝を含む「三綱五教」の教えが示され、前者では、

父母を 見れば尊し 妻^め子見れば めぐし愛し 世の中
は かくぞことわり……（五・八〇〇）

と、父母を尊ぶことが妻子への慈しみとともに世の道理として説かれる。また大伴家持の天平感宝元年（七四九）の「史生尾張少咋に教え諭す歌一首」においても、同様に、

大汝 少彦名の 神代より 言ひ継ぎけらく 父母を
見れば尊く 妻子見れば かなしくめぐし うつせみの
世のことわりと……（一九・四一〇六）

と、父母・妻子それぞれへの態度が道理として歌われる。父母への思いは、儒教社会に生きる者にとっては「世のことわり」であり、社会の秩序である。^{（注）}

当該歌においては現世が強く意識されている。「墨吉」に戻った浦島子については、「家見れど家も見かねて 里見れど里も見かねて」と歌われ、家も里も見つけられないままに「家ゆ出でて三年の間に 垣もなく家失せめや」（③）と、心の内で不思議に思ったとある。この「三年の間」は常世に行く以前の現実生活を起点に、今に続く時間認識であり、当該歌はあくまで現世に軸足を置き、現世の内に発想されていることが明らかである。浦島子は常世に渡ったとはいえ、作品内ではあくまで現世に生きる存在として造形されているのであるから、社会生活の論理として父母への思い、家への思いを抱くのは当然である。現世に生きる以上、父母・家へのこだわり自体は道理であり、愚者たる要素ではあり得まい。むしろ、

「父母」「家」「里」への強いこだわりは、浦島子の現世への強い執着を示すものであり、この作品の基調を成す大きな特色といえる。

もつとも、浦島子が現世の継続的な感覚で三年とした時間は、常世との対比では三百余年にも相当する、「家」「里」がなくなるほどの長い時間であった。『丹後国風土記』逸文では、この点を具体的に次のように叙述する。^(注16)

即ち村邑を瞻眺らふに、人も物も還り易り、また由るによしなし。ここに郷人に問ひて曰はく、「水江の浦の嶼子の家人、今何処にか在る」といふ。郷人答へて曰はく「君何処の人なる、旧遠人を問ぬや。吾、古老たちに聞くに曰はく、「先つ世に水江の浦の嶼子といふものあり。独蒼海に遊びまた還り来ず」といひ、今に三百余歳を経しに何にそ忽にこを問ふや」といふ。

浦島子が故郷に帰って見ると、人も物も変わってしまったため、里人に浦島子の家族はどこにいるのか尋ねると、里人はそんなことを聞く浦島子を不審に思いつつ、古老から「水江の浦の嶼子といふもの」が前代にいたが、海原に出て二度

と帰って来なかったと聞いている。その時から三百余年を経ているのにどうして尋ねるのかと言ったという。ここでは時間の経過が明示されているが、当該歌では「家ゆ出でて三年の間に」垣もなく家失せめや」と、あくまで「三年」の内の出来事として示そうとする。ここに示唆されるのは「時の移ろい」の早さであり、無常な世のあり方である。

浦島子の「父母」「家」「里」へのこだわりは、述べたように現世への執着であるが、執着しても無常の世の道理では、現前するのは、父も母も、家も里もない、かりそめの現世ということになる。「家見れど家も見かねて 里見れど里も見かねて 怪しみと」はまさにそうした折の感慨である。

おのずと真実の現世が求められることになるが、続く「この箱を開きて見てば もとのごと家はあらむと」(④)に示される感慨は、そうした心の動きと理解できる。その希求が「この箱を開きて見てば」というように櫛笥の問題となるのは、常世を離れるにあたって「常世辺にまた帰り来て 今のごと逢はむとならば この櫛笥開くなゆめ」と、妻から櫛笥が渡され、開いてはならないという言葉があったからである。この

「見るなの禁」には、常世に帰るためには開かない、逆に開けば現世に止まることになるという、二者択一的な対比の構造が含まれている。

結果、浦島子は「玉櫛笥少し開くに」と、櫛笥を開き、みずから現世を選択する。「この櫛笥開くなゆめ」と言われながら、禁忌を侵すのは、浦島子の現世への執着ゆえである。当該歌では浦島子はそのように造形されているということになる。

浦島子が櫛笥を開いた結果、「白雲」が箱から出て「常世辺」にたなびき、それを求めて「立ち走り叫び袖振り こいまろび足ずりしつ」も、たちまちに氣を失ってしまう。そして、「若かりし肌」には皺が寄り、「黒かりし髪」は白髪となり、のちには息まで絶えて、ついには死んでしまったとその結末が示される。

箱から「白雲」が遊離することによって死が引き起こされたということになり、「白雲」は靈的な存在として、従来、(ア)妻たる神女の靈魂、(イ)常世の靈威など複数の説が見られる。^(注17)「白雲」が常世とかかわることは「常世辺にたなびきぬれば」

の表現からうかがわれるところである。浦島子の言う「三年」が家も里も消失するほどの多年を内包するとすると、現世に戻った浦島子が生きながらえているのは、不老不死の常世の靈力を保持していたからということになるろう。

常世にかかわっては次のような歌が伝わる。

大伴宿禰三依、離れてまた逢ふことを歎ぶる歌一首

我妹子は常世の国に住みけらし 昔見しよりをちましに
けり

(4・六五〇)

作者は大伴三依で、離れていた女性との再会を喜んだ趣である。あなたは常世の国に住んでいたに違いない、昔見た以上に若返られましたと、今に変わらぬ相手の様子を賛美したものである。たぶんに挨拶の歌であらう。ヲツは若返る、元に戻ることを意味する語で、復活・再生の觀念を内包する語である。以前に、当該歌に触れてこの觀念を分析したことがあり、^(注18)詳細はそちらに譲るが、注意したいのは若返りにかかわって、觀念上のこととはいえ、常世の靈威の獲得が認識されていることである。外在する靈威、言い換えると、活力の獲得によって身体が活性化するという考え方の存在したことがわ

かる。

現世とは時間觀念の異なる常世に住んだ浦島子が現世に戻るためには、生命の保持にかかわって、現世と常世との時間差（三年は三百余年）を埋め合わせるものが求められる。それがなければ三百余年という時間を超えて、現世に戻った浦島子の命を保つことはできないのが道理である。妻である常世の神女から渡された櫛笥は、いわばそうした常世の靈威の入れ物であり、「白雲」はその靈威の象徴ということになる。浦島子が現世を選択し、現世の人となるとき、常世の靈威が消失するのは当然であり、その点をこの作品では「白雲」の「常世辺」へのたなびきとして形象化しているのだとみることができる。

「古い」から「死」への身体の急速な変化の論理はこのように解することができる。もっとも、そのきっかけは何かと言えば、浦島子の現世への執着により、「この箱を開けて見れば ものごと家はあらむ」と思ったことにある。これが因となって、浦島子は箱を開き、結果的に死を招来したのである。浦島子の死はその点で、因果応報の結果である。因果応

報の理を知らない者は、先に整理したように「愚痴」「愚人」（『日本靈異記』）である。浦島子が「愚か人」と評されるのもこの点にかかわってのことであろう。

反歌でも、こうした長歌を受けて、「常世辺に住むべきものを」と常世を是としつつ、「己が心からおそやこの君」と、自分の心ゆえに愚かな結果になったことが歌われる。この場合の「己が心」とは具体的にはどのようなことをさすのか。長歌の表現に求めれば、櫛笥を開く際に際して「この箱を開けて見れば ものごと家はあらむ」と思ったこと、それが当たるだろう。これも長歌と事は同じで、浦島子の道理への無理解ゆえに「おそやこの君」と評されるのである。

浦島子が「世間の愚か人」「おそやこの君」と評されたのは、常世への回帰を前提に開けないと誓った櫛笥を、無常でしかない現世への執着のために、因果応報の理も解さずに開けてしまい、老いと死という、予期せぬ結末を招いたこと、その点にかかわってのことと考えられる。

長歌において、常世と対比しつつ描かれるのは、浦島子の現世への執着、そして現世および浦島子の移ろいのさまであ

る。こうした文脈のなかで、因果の理を知らず櫛笥を開いて命まで落とした浦島子は、所詮は無常でしかない世の道理をわきまえず、無常な現世に固執した愚者ということになる。浦島子が、無常観の纏綿するヨノナカの語を冠して「世間の愚か人」と表現されるのも、奈良朝の時代思想を背景に、無常な現世に執着する愚かな人間像を意識してのことであろう。虫麻呂がこうした浦島子の造形を通して問いかけるのは、常なき世にあつて、ひたすら現世に執着し続ける人間の姿であり、その是非と考えられる。

結

本稿では虫麻呂の当該作品の意図するところを、奈良朝において社会に浸潤していた無常観とのかかわりにおいて考察した。直接には浦島子が「世間の愚か人」と評される由縁を考察したものである。虫麻呂は浦島子を、常世での永生を捨て、無常な現世に固執する人間として造形した。無常の認識は有限の生にしか生きられない人間、およびその社会を説明するものとして万葉の時代に社会に浸透したと考えられる。^(注19)

それゆえ、無常を介して人間をとらえるとき、そこには人間存在についての問いかけが生じることになる。

そうした時代の無常観を背景に、人間の存在を見つめた歌に卷十三の次の一首がある。

高山と 海とこそば 山ながら かくも現しく 海ながら
然真ならめ 人は花ものそ うつせみ世人

(三三三二)

山と海とが実際に変わることなく存在するのに対し、「人は花もの」と言い、はかない存在であることを言ったものである。「人は花ものぞ」と歌われるように、無常の認識を前提とすれば、「花もの」たる人間の運命、人間存在のありようは誰もが同じである。浦島子もまた例外ではない。人間存在そのものがそうした「花もの」であるのに、虫麻呂は浦島子をそうした現世に固執する人間として造形し、みずから「世間の愚か人」「おそやこの君」と評価する。この作品がこうした歌いぶりとなっているのは、虫麻呂が現世に固執せざるを得ない人間のありようを見つめつつ、さあみなさんはどうお考えかと聞き手に問いかける意図があるからであろう。この作品

が主題とするところは、浦島子の選択、禁忌の侵犯をめづつて、常なうはかない現世にあつて人間はどうあるべきなのか、そのことへの問いかけと解される。

(注)

- (1) 『万葉集』本文の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）を基本とし、私見により表記を一部改めたところがある。「世間の愚人」についても、ヨノナカは「世間」と表記する。
- (2) 土地に取材したことを説く論考に、櫻井満「水江浦島子を詠む歌」（『万葉集の民俗学的研究』おうふう、一九九五年）、金井清一「虫麻呂の浦島伝説歌」（『国文学解釈と鑑賞』第五一卷第二号、一九八六年二月）などがあり、書承を説く論考に、高野正美「水江の浦島子」（『万葉歌の形成と形象』笠間書院、一九九四年）などがある。また作者の創作の見解を示した先駆的注釈に沢瀉久孝『万葉集注釈』（中央公論社）がある。
- (3) 佐竹昭広「『無常』について」（『万葉集再読』平凡社、二〇〇三年）
- (4) 当該歌について無常思想との関わりを指摘する論考に、大久保廣行「水江浦島子詠―高橋虫麻呂の世界―」（『筑紫文学園と高橋虫麻呂』笠間書院、二〇〇六年）、注2高野論文などがあり、すぐれた見解が示されている。
- (5) 大谷雅夫「萬葉集と仏教、および中国文学」（『新日本古典文学大系』『万葉集四』岩波書店、二〇〇三年）
- (6) 中村元「仏教語大辞典 縮刷版」（東京書籍、一九八一年）
- (7) 用例の検索は、藤井俊博「日本霊異記漢字総索引」笠間書院、一九九九年）による。また本文の引用は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。
- (8) 『諸経要集』（唐の道世著、七世紀）は奈良朝受容の仏典の一つ。石田茂作「写経より見たる奈良朝仏教の研究」（『東洋文庫』一九三〇）参照。
- (9) 『日本霊異記』上巻の底本とされる興福寺本には「男人」とあり、国会図書館本、群書類従本には「愚人」とある。現在の各種全集類においても校訂者の判断により、双方が見られる。『新編日本古典文学全集』には「男人^{そのこ}」とあるが、「愚人」として掲出する。
- (10) 新日本古典文学大系『万葉集四』（岩波書店）当該歌脚注。大谷雅夫「『万葉集』の訓詁三題―「灰にいていませば」（二二三）・「ある愚人」（三八七八左注）・大島の嶺に家もあらましを」（九二一）―」（『美夫君志』第一〇一号、二〇二〇年一〇月）にも問題点の整理と見解が示されている。
- (11) 注6に同じ。
- (12) 拙稿「無常観の浸潤と万葉集の変容」（辰巳正明編『万葉集』と東アジア）竹林舎、二〇一七年）参照。類型を基とした整

理はこの論考でも行っている。

- (13) 注12拙稿参照。「かくのみ」の表現は、内容により、死別(3・四七二、四七八、5・八八六、15・三六九〇)、生別(7・一三二一・一三三八三)、老い(5・八〇四)と整理できる。

- (14) 中西進「愚について」(『旅に棲む―高橋虫麻呂論』角川書店、一九八五年)

- (15) 「世のことわり」については、櫻井満「万葉集の民俗学」(『万葉集の民俗学的研究』おうふう、一九九五年)参照。『万葉集』の「世のことわり」の例には、仏教の因果応報を世の道理として詠んだ、「世の中の常のことわり かくさまになり来にけらし すゑし種から」(中臣宅守、15・三七六一)の一首も見られる。

- (16) 本文の引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)による。

- (17) (ア)の神女の靈魂と見るのは『全註釈』『新潮古典集成』『和歌文学大系』『釈注』、注4大久保論文、岩波文庫など、常世の靈威と見るのは、注14中西論文、『全註』、拙稿「古代の生死観・靈魂観」(『柿本人麻呂の時代と表現』おうふう、二〇〇六年)などである。先行研究は(ア)と解するものが多いが、神女の靈魂が浦島子の身体とどのようにかわり、またその靈魂がなぜ浦島子の命を三百年も保つことになるのか、説かれることはなく問題であろう。なお、浦島子の靈魂と解する見解(三浦佑之『浦島太郎の文学史』五柳書院、一九八

九年、多田一臣「水江浦島子を詠める歌」、高岡万葉歴史館『伝承の万葉集』笠間書院、一九九九年など)もあるが、(イ)の見解でも常世の靈威は浦島子の身体に獲得されるのだから浦島子の靈魂の一部ということになる。その点で、「浦島子の靈魂」という理解は最大公約数的な把握といえよう。

- (18) 注17拙稿。

- (19) 注12拙稿。